第三講　「逆説」の読解②

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

まさしくレトリックの歴史は退却につぐ退却の歴史であった。その戦場は法廷・議場から、作家・詩人の書斎、学校の教室、研究者の書斎へとしだいに縮小しつづけた。そして十九世紀末から二十世紀の初めにかけて、確かにレトリックは一度死を宣告されたはずなのだ。もし教育制度の庇護を受けて学校で教えられていなかったら、レトリックの死はもっとずっと早まっていたことは間違いない。

人によってその判定は異なるとはいえ、レトリックの死は常に近代の始まりと関連づけられ語られてきたことは動かない事実だ。デカルト以来の近代合理主義・客観主義の要請にレトリックは答えられなかったのだ。合理主義と経験論は万人の共有する「理性」と「感覚」にとって「明証的」なものを真理と[1]ソテイした。合理主義者にとっては観念的実体が、経験論者には感覚的実体が、真理（真）として個人的な思惑とは別に、人間の主観の「外部に」客観的に存在する。この近代主義は「客観主義的実在論」と呼ぶこともできる。

真理は客観的に存在するのだから、その真理をありのままに提示すればよい。論証すれば足りるのであって、[Ⅰ]の必要はない。いわんや言葉を飾る必要は微塵もない。弁論術も修辞学も出る幕はないということになる。「理性」に叶うこと、それがすべてだ。たとえばイギリスの経験論者ジョン・ロックは言葉の[Ⅱ]の一つにレトリックを挙げて手厳しい非難を浴びせている。

「機知や空想は、無味乾燥な真理や事実の知識に比べてたやすく世に喜ばれるから、言語上の比喩的な話や諷刺が、言語の不完全もしくは[Ⅱ]と認められることはまずなかろう。が、それにもかかわらず、事がらのありのままを言えば、語順と明断さを除くいっさいの修辞の技法は、すなわち修辞法の案出したいっさいの人工的で比喩的な言葉の使用は、ただ間違った観念をほのめかし、情動を動かし、これによって判断を誤らすだけであり、したがって実は完全な[2]ギマンなのである。」（『人間知性論』）

もちろんレトリックに対するこの手の反論はギリシア・ローマの時代からあったが、近代合理主義（実証主義＝科学主義）の[3]ハケンがレトリックの「[Ⅰ]」にとどめを刺したということは出来るだろう。

われわれが今さしあたり問題としたいのはレトリックの死亡診断書の作成よりは、なんだかんだと言われながらも一つの学科目（技術）がかくも

永きにわたってその余命を保ったということだ。二五〇〇年——今にして思えばそれは気の遠くなるような時の経過だ。人はその死に驚くよりもむしろその息の長さに思いをいたすべきだろう。

この長寿はいったい何を物語っているのか。

人は必要のないものをいつまでも保持するはずはない。保持するからにはなんらかの必要性をそこに認めていたのだろう。してみればレトリックは役に立たないといわれ続けながらも、人間の奥に潜むある種の要請（必要）には応えていたにちがいない。

その要請（必要）とはいったい何か。それに答えるのはなかなか難しいが、それが人間の言語＝認識活動の根底に関わっているということだけは言えるだろう。さらに言えば、それは人間の理性＝意識の領野というよりは無意識のそれに関わっているらしい。だからこそそれはなかなか意識されにくく、それと指すことが難しい。

これまでレトリックは弁論術としてであれ、修辞法としてであれ、いずれにしても人を魅惑し、［ I ］するための「技術」として位置づけられてきた。われわれが近い過去において見届けたものは、また今はっきりと確認しておかなければならないことは、技術としてのレトリックの死（無効性）であって、レトリックそのものではないということだ。この二つの

ことははっきりと区別しなければならないだろう。

　レトリックは世界（自己）を「語る」ための技術であるだけではない。世界を「発見する」ための方法でもある。世界を「読む」ための方法でもある。認識の型としてのレトリック、認識の枠組みとしてのレトリック。われわれが注目するのはそうしたレトリックの認識論的な側面である。それとはっきりと明示しはしなかったけれども、古典レトリックもその原型的なものを曲がりなりにも指し示していたことは事実なのだが。

　私たちの日常の発話は手垢にまみれた「慣用表現」からなっている。私たちは他人がすでに使った言葉を引用しながら、自分のおもいを表現する。ほとんどの場合はそれで十分に用は足りる。コミュニケーションにトラブルが生じたとき、あるいはコミュニケーションをより豊かに高めようとするとき、引用に工夫を凝らす。これが恐らくレトリックの始まりだろう。（イ）

　ところで、言葉というものは意外に融通無碍（ゆうずうむげ）なものである。ふだん結びつかないものでも強引に並べてみると何となくそれらしい意味を帯びてくる。「冷たさ」と「情熱」は常識的には矛盾する観念である。しかし「冷たい情熱」という言い方はある条件下では立派に通用するはずだ。小柄でも立派な活躍をした野球選手や力士について「小さな大投手」とか「小さな大力士」とか呼ぶことは実際におこなわれた。このような「［Ⅱ］」を

逆手にとった挑発的な言葉の使用を古典レトリックでは「撞着語法」（字句の単位）あるいは「逆説法」（文の単位）と呼んだ。（ロ）

成句や諺にもこの種の表現は実に多い。思いつくままに挙げてみれば、「慇懃（いんぎん）無礼」「負けるが勝ち」「逃げるが勝ち」［A］など。見られるとおり矛盾する観念の結合や常識を逆なでする提案の数々である。（ハ）

この例からも知られるように言葉の意味はおどろくほど伸縮自在で可塑性がある。もし言葉の意味が固定的であれば言葉の工夫を受けつけるはずがない。意味が流動的であり、伸縮可能であるからこそレトリックの出番もあるというものだ。言葉の「意味」の境界はファジーであり、おどろくほど弾力的である。「意味」は「星雲」、あるいは「氷山」にたとえることができるだろう。その境界のファジーさは、中心らしきもの（中心的意味）はあるが周縁にいくにつれて輪郭（含意的意味）がぼやけてしまう「星雲」を思わせる。その豊かな可能性については、姿を見せているのはほんの一部分（表層的意味）で実は水面下にその体積の大部分（深層的意味）が隠されている氷山を思わせる。意味世界はそうしたあまたの「星雲」や「氷山」の集合だとイメージできるのではあるまいか。（ニ）

「引用」の工夫、つまりレトリックとは「［Ⅲ］／深層的」意味の活性化の方法にほかならない。佐藤信夫のキーワードを借りれば「意味の弾性」

——これこそがレトリックの拠って立つ基盤である。[a]こうした言葉に対するしなやかなスタンスは「思考の弾性」、自由な発想とも連動している。（ホ）

分かりやすい例を考えてみよう。たとえば現在われわれがごく普通に使っている「時は金なり」（Time is money.）という格言。この格言はベンジャミン・フランクリンのものと一般に信じられているが、その出典の詮索はともかく、産業革命以降の功利主義的考え方を見事に要約している。この格言はいわゆるメタファーで、時間をお金にたとえた表現である。これは単に時間とお金を比較しているにすぎないのだろうか。いや、そうではあるまい。時間に対する発話者の認識（姿勢）をも表明している。今でこそこの格言の新しさは気づかれにくくなっているが、当初は衝撃的だったはずだ。

最初にこのメタファー表現を思いついた人の立場に身を置いてみよう。「時」（時間）と「金」（貨幣）という観念は確かにそれまでも存在していた。しかし誰もこの二つの観念を結びつけて考える人はいなかった。「時」と「金」はお互いに無関係にこの世に存在していた。つまりこの二つの観念の間には「類似性」は認められていなかったということだ。しかしある時まったく異質なこの二つの観念の間に「類似性」を感じとる人間がでてきた。もちろんそれは直接的な類似性ではない。直接的な類似性が問題に

なっているのならとっくの昔に誰からも気づかれていたはずだから。問題の類似性は言ってみれば「間接な」類似性である。

　時間は貴重なものではないのか。もしそうだとすれば時間は「貴重なもの」という点においてお金と似ているのではないか。もちろんこの推理は意識的になされたとは限らない。漠然としていたものが、ある日とつぜん「時間はお金ではないのか」という形で意識化されたのかもしれない。そのプロセスはどうであれ、それは今まで誰もが思いつかなかった関係の設定だ。それは新しい「類似性」の発見と言うべきだろう。要するに時間とお金の間にそれまで想定されていなかった「関係」が結ばれたということである。

　投げられた小石が大きな波紋を水面に描くように推理が広がってゆく。お金という観念の周りにはさまざまなイメージが揺曳している。それらのなかのいくつかのイメージが時間に投影（写像）される。いわばお金という「解読格子」を通して時間が解釈されることになる。その結果でてきた時間観念はそれまでとは違ったものとならざるをえない。

　とうぜん「時は金か」という反論があったはずだ。あくせくと働くことではなくて、のんびりと時間を過ごすことこそが幸福の極みだとする文化圏の人たちにとってそこに示された時間観は承服しがたいものだったろ

う。それは異質な時間認識である。時間は「貴重なもの」であり、無為に過ごされるべきではない。それはまたお金のように計量可能なもので、時給、日給、週給、月給というような形で支払われて然るべきものなのだ。「時は金なり」というメタファーは時間認識の変革でもあったのである。

［　X　］

レトリックは世界をどう「表現する」かに関わるだけでなく、世界をどう「読む」かに関わる営みである。古典レトリックは話し手＝書き手の立場が優先していた。いかにうまく話すか、いかにうまく書くか、それが中心的な関心だった。無論それも大事な問題であるが、聞き手＝読み手の視点もそれに劣らず大切だ。現代レトリックは「世界／テキストを読む」認識者の立場を強調する。想像力を羽ばたかせると、この世界の事物間には思いもかけなかったような関係が結ばれることになる。それは新しい物の見方に通じる。

（野内良三『レトリックと認識』による）

問一　次の文は、本文中に入るべきものである。（イ）～（ホ）から最も適当な箇所を選び、解答欄に記入せよ。
もちろん比喩的表現の限界を承知の上で言うのだが。

問二　段落［　X　］の部分に、次の文①～⑤を適切な順序に並べて入れるとする。最も適当なものをイ～ヘから選び、解答欄に記入せよ。
① それも強力な手段である。
② この意味ではレトリックは表現の手段にとどまらず認識の手段でもある。
③ 現代レトリックはこうしたレトリックの認識論的側面に着目する。
④ レトリックはイメージに関わる営みであり、しなやかな感性が求められる。
⑤ それは理性的な認識というよりはむしろイマジネーションによる認識だ。

イ　③②①⑤④　　ロ　③⑤④②①　　ハ　④⑤②①③
ニ　④②①③⑤　　ホ　②①④⑤③　　ヘ　②①③⑤④

問三　空欄［Ⅰ］・［Ⅱ］・［Ⅲ］に入る最も適当な語句をそれぞれ次の中から一つずつ選び、解答欄に記入せよ。
Ⅰ　イ　誘惑　　ロ　論駁　　ハ　説得　　ニ　啓蒙
Ⅱ　イ　難点　　ロ　誤用　　ハ　未整備　　ニ　不勉強
Ⅲ　イ　流動的　　ロ　弾力的　　ハ　表層的　　ニ　周縁的

問四　傍線部ａ「こうした言葉に対するしなやかなスタンス」という表現が示す態度を説明している最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記入せよ。

イ　言葉の意味は伸縮自在で可塑性がある。そうした特性に注意することによって、近代合理主義で死を宣告された修辞法を再評価するという態度。

ロ　言葉の意味には一種の流動性がある。しかし、それを意識しすぎるとコミュニケーションにトラブルが生じることもある。その点に注意をするという態度。

ハ　言葉の意味には伸縮可能性があり、その境界はファジーである。そうした言葉の意味の特性に注意して、工夫しながら言葉を利用するような態度。

ニ　言葉の意味には星雲や氷山にたとえられるような弾性があると言えるが、それ自体が比喩的な発想である。そうした発想で議論できる柔軟性を養うという態度。

問五　空欄［A］に入る例として適当でないものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　有難迷惑

ロ　公然の秘密

ハ　急がばまわれ

ニ　損して得取れ

ホ　帯に短したすきに長し

問六　本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、解答欄に記入せよ。

イ　言葉というものには流動性、伸縮可能性というものがある。それを利用した点で、レトリックは、近代合理主義の立場から厳しく批判され、一度死を宣告された。しかし、実は、その息の長さに思いを致すと、そこにこそ新しい物の見方に通じるものがあると言える。

ロ　レトリックは、世界をどう認識するかということに関わる営みでもある。その背景には言葉の持つ弾力性といったものが指摘できる。レトリックとは、近代合理主義の中で批判された、いかに効果的に表現するかという技術的なものだけではない。

ハ　古典レトリックは、いかにうまく話すか、いかにうまく書くか、を中心的な関心にしていた。しかし、そこには意義が見いだせない。ただ間違った観念をほのめかし、情動を動かし、これによって判断を誤らせるものとして批判されているからである。

ニ　言葉の「意味」の境界はファジーであり、おどろくほど弾力的である。近代合理主義からの批判はあるにせよ、技術としてのレトリックは、そうした言葉の性質を利用し、様々なメタファーを生み出す。こうしてできたメタファーは世界をどう「読む」かに関わると言える。

問七　傍線部1〜3にあたる漢字を含むものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、解答欄に記入せよ。

1　イ　ソ質　ロ　ソ状　ハ　ソ先　ニ　挙ソ

2　イ　詐ギ師　ロ　ギ音語　ハ　ギ惑　ニ　ギ能

3　イ　ハ出　ロ　制ハ　ハ　ハ壊　ニ　ハ持

（次ページより解答欄）

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七
		Ⅰ				1
		Ⅱ				2
		Ⅲ				3

第三講「逆説」の読解②　解答

問	解答
問一	ニ
問二	イ
問三 Ⅰ	ハ
問三 Ⅱ	ロ
問三 Ⅲ	ニ
問四	ハ
問五	ホ
問六	ロ
問七 1	ニ
問七 2	イ
問七 3	ロ